

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月10日現在

機関番号：31302

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23701007

研究課題名（和文） 日本における銅人形製作の医学史・工芸史の研究

研究課題名（英文） Study on the History of Medicine and Industrial Art related to the Manufacturing of Human Phantoms in Japan

研究代表者

加藤 幸治 (KATO KOJI)

東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号：30551775

研究成果の概要（和文）：

日本で製作された銅人形（経穴と経絡を示した人体模型）で有名な資料は、東京国立博物館とハンブルグ市立民族学博物館に所蔵されている。この二点は、ともに飯村玄斎が考案したと記されているという共通点がある。銅人形は、近世日本の医学的知識の水準を示す資料としてよく紹介されるが、単なる近世の医学教材の標本資料としか位置付けられてこなかった。本研究では医学史的意義と工芸史的意義を明らかにする研究を試みた。

研究成果の概要（英文）：

A copper doll is a human phantom showing points and meridians (paths of body energy flow) used in acupuncture and moxibustion. The most famous copper doll manufactured in Japan are preserved by the Tokyo National Museum. The most remarkable feature common to the copper doll designated as a Japanese national treasure is that there is a description that they were designed by Gensai Iimura. Copper dolls are often used as an indicator to show the high standard of medical expertise in Japan in the modern age. There are two missing perspectives in this conventional approach. One is a perspective on the circumstances and political meaning behind individual copper dolls. The other is the perspective from the industrial art history.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：日本民俗学・博物館学

科研費の分科・細目：科学社会学・科学技術史

キーワード：医学教材・工芸技術・経穴銅人形・飯村玄斎・漢方医学・和歌山藩・

国際情報交換・ドイツ在外日本資料

1. 研究開始当初の背景

筆者は人・物・情報の流通による新技術や知識の受容の過程でいかなる文化変化が起こるのかを、物質文化を通して研究することを一貫したテーマとしている。そこでは、物質文化と文献史料、聞書きを総合的に用いて、歴史的展開を追跡することを試みてきた。その研究素材として筆者が目にしたのが等身大の人体模型、いわゆる銅人形とよばれるものである。銅人形は、気血が流れる経絡と鍼や灸を施す経穴とを、立体の人体模型に表現

したものである。それは、経絡・経穴の知識の集成として、また漢方医術の人体観を具現化した作り物として、また教育と技術鍛錬の教材として製作された。

これまで銅人形は、単なる近世の医学教材の標本資料としか位置付けられてこなかった。すなわち、その研究においては、中国で発達した医学とその教育法と教材が、日本にどのような形で受容されたかに重点が置かれるが、ここには二つの視点が欠落している。ひとつは、当時の医学的知識を総動員して作

られた個々の銅人形が、いかなる事情から製作が進められ、その製作がどのような政治的・文化的意義を持ったかというローカルな背景に対する歴史的視点である。もうひとつは、銅人形をはじめて製作した当時の工人は、どのような技術と工夫を凝らして、未知の銅人形制作に臨んだかという工芸史的視点である。

ところで、鍼灸による病気の治療は、もともと中国から我が国にもたらされた知識と技術であるが、江戸時代以降、庶民にも施術されるものとなった。江戸時代には数多くの鍼灸の理論書や教則本が出版された。また、人体の経穴と経絡を図示した明堂図も、刷り物で数多く製作され、技術の教授に使われた。また、木製や和紙の張り製の銅人形も、教具として用いられてきた。これら鍼灸指南書、明堂図、木製・紙製銅人形は、現在も各地の博物館等に保管されている。これに対し銅合金を素材として用いて製作された銅人形は、当時の人体に対する知識の粋を極めたものであった。

我が国で製作された銅人形のなかでもっとも有名な資料は、東京国立博物館蔵の二体の銅人形であり、一体は国の重要文化財に指定されているまた、ドイツのハンブルク民族学博物館には、これと極めてよく似た銅人形が保管されている。重文「銅人形」とハンブルグ民博「銅人形」は、経絡・経穴のみならず精巧に模造した木製の五臓六腑や骨格も付属する。東京国立博物館所蔵の重文「銅人形」と、ハンブルグ民博「銅人形」には、共通点がある。ともに飯村玄齋という人物が考案したと記されていることである。これまでの研究においては、これら銅人形の医学の技術史的な研究は多いが、製作背景に関わる歴史研究はあまり多くない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、江戸時代に漢方医学の粋を集めて製作された銅人形に応用された当時の工芸技術とその製作者、製作の背景について研究することと、銅人形製作に積極的に関わった紀州藩と、主導的役割を果たした飯村玄齋の分析によって、銅人形製作の医学史的・工芸史的意義を明らかにすることであった。

そのためには、銅人形が製作された時代背景、またそれを主導した紀州藩の個別の事情などについて、具体的に考察することが求められた。

3. 研究の方法

本研究の目的のひとつである製作者、製作の背景についての調査は、銅人形の実物資料が非常に繊細に製作されており、且つ安定していないため、調査先の博物館で直に接触し

ての調査や、姿勢を動かしての詳細な検分が不可能な場合が多いことから、困難さがあった。これを展示時における観察や高精細画像で撮影された二次資料を用いてそれを補った。東京国立博物館、ハンブルク民族学博物館、東京大学医学部所蔵の三体の銅人形が調査対象であった。

もうひとつの目的である紀州藩と藩籍医師の調査による銅人形製作の医学史・工芸史的意義解明のための調査では、紀州藩の動向と幕府の動向をふまえて、飯村玄齋や岩田道雪らの活動の実態を文献資料から明らかにした。また、近世期に幕府医師によって行われた調査とそれに伴う修復、近代の医学会開催時の展覧会での陳列など、製作された銅人形がどのようなまなざしに曝され、意味づけられてきたかについても考察を深めた。

そのために、和歌山県和歌山市と愛媛県西条市での文献調査、およびドイツ国内での博物館資料調査は不可欠であった。

4. 研究成果

本研究で明らかにしえたことは以下の点である。

第一に、紀州藩は一七世紀中葉の一五年間に、合計六体の銅人形を集中的に製作し、その後は製作しなくなったことがより明白となった。重文「銅人形」の監修者である飯村玄齋は、三代目飯村玄齋栄頭であり、彼は二体の銅人形（東博所蔵とハンブルグ民博所蔵）を監修した。飯村玄齋栄頭は銅人形を監修して昇進し、何らかの理由で失脚したが一定の名誉回復がなされたという浮き沈みの激しい人生を歩んだ。これらは紀州藩の史料から断片的に分かったことである。

第二に、銅人形製作から一三〇年あまりたって、幕府医師山崎宗雲が閲覧を申し出て、その折に馬具師によって修復がなされたことが重要である。その山崎は、別の銅人形を監修し、結果的に紀州藩の銅人形と山崎が製作した幕府医学館の銅人形はともに別経路で国に寄贈され、東京国立博物館所蔵となっている。この時期の漢方医学に対する再評価あるいは漢方医学内の複数のアプローチのせめぎ合いなど、同時代の背景とのかかわりからさらなる再検討が必要である。

第三に、銅人形は大正末期に開催されたアジア地域の国際的医学会の大会が日本で開催されたときに、二つの銅人形が出陳された。アジアの医学を西洋医学と対比するまなざしのなかで、展示を通じて一般に披露されたのである。

また、この研究の過程で、紀州藩は以下の六体の銅人形を作成していたことがわかった。

●銅人形A

一六五四年初代岩田道雪重信が、藩命により製作に関わった二つの銅人形のうちのひとつ。

●銅人形B

一六五四年初代岩田道雪重信が、藩命により製作に関わった二つの銅人形のうちAでないもの。

●銅人形C

一六五四年以前A・Bの銅人形製作の褒美として、初代岩田道雪重信に下賜された旧紀州藩所蔵の銅人形。一八〇七（文化四）年時点で岩田家に伝来。

●銅人形D

一六六〇年？ 東京大学医学部に所蔵されている「銅人形」。紀州藩から下賜された銅人形をもとに岩田道雪重信が紙塑で製作されたと思われる人形。

●銅人形E

一六六三年東京国立博物館に所蔵されている重文「銅人形」。「考」三代目飯村玄齋栄頭・秋田古庵・「工」岩田伝兵衛・「鑄」又三郎によって製作され、一七九七年に幕府医師に見せるため馬具師が修理し、西條藩主松平頼英が所有し、何かの経緯で国に寄贈された。

●銅人形F

一六六九年ハンブルク民族学博物館に収蔵されている銅人形。三代目飯村玄齋栄頭が「考」と銘がある。一九二九（昭和四）年に寄贈されたとされる。

本研究では、紀州藩における銅人形製作について明らかにしうる史料の紹介をしながら、銅人形の来歴、その監修を行った人物、そして近代における銅人形の展示について資料調査を進めてきた。現存する実物資料は、重要文化財に指定されていたり、海外に所蔵されていたりと、それらを熟覧することが困難な状況であり工芸技術的な検討は困難であった。しかし、銅人形Dについては、以下の調査を行うことができた。

今回の調査では、東京国立博物館所蔵の重文「銅人形」の熟覧は、筆者に許可されなかったが、特別陳列にて当該資料が展示場に陳列された際、展示場内でガラスケース越しに調査することのみを許された。この資料の観察によるいくつかの所見をここで述べる。

まず、全身が網目のように透かした銅の素材でできていることはわかるが、詳細に見てみると、銅を六角形の亀甲紋を並べたようなパターンで抜いて作られた板を、立体に組んでいることがわかる。体部全体は、六区に分けて鑄造していると『図版目録 日本彫刻篇』（東京国立博物館編一九九九）は記している。これをどのような技法で製作するのかは不明である。また表面は平滑ではなく、波打った凹凸が全体に見られる。耳・眼・唇・乳首・男性器・手足の爪は銅合金で作った別

の部品が付けられ、眉毛は動物の毛を移植している。全体としては、細身の男性老人として造形されている。全身に張り巡らされた五色の経絡は、薄い板状のテープのようなものを貼り付けられており、通過する経穴は赤色で着色されている。金属に対し、どんな顔料と技法を用いて着色しているかはよくわからないが、多色の顔料を表面に塗布していることは目視で確認できた。また、胸板、背中、首筋部分は、体の表面の網目板を外せるようになっており、持ち手となる小さな輪金具も装着されている。内臓は木製で五臓六腑と骨が着色されて文字通り内蔵されている。加えて、大きな破損箇所がみられる。まず足の甲の上から足首にかけて両足とも屈折した痕跡があり、破損箇所は修理されていない。また右腕から肩にかけて部品が曲がっており、裏側には太い銅線による雑な修復痕も認められる。右上腕部分は部品が大きく欠損しており、あるいは右腕はこの修復した銅線のみで接続し

ている状態かもしれない。右腕の肘が不自然に外側に張っているのは、本来は腕はもう少し手のひらを前方に見せるような角度でついていたことを窺わせる。体全体も前傾しており、胴部は土台に固定された支柱に、二本の革紐のような太い紐と一本の銅線で結び付けられている。これら破損部分を総合して考えると、おそらくこの銅人形は一度、立った状態から右前に向かって倒れて破損している。両足首の破損は、足がある程度固定された状態から体が前屈したことを示しており、その破損は特に左足部がひどい。これがいつの時点の破損事故なのかはわからない。どの部分が一七九七年に修復された修復か所で、どの部分がそうでないかを知る手掛かりはないが、右腕を留めている銅線や背中に固定している革紐は、近世まで遡るものではないように見える。ちなみに土台は木製で、下をのぞくと木製の車輪が四つ装着されている。かつては銅人形を支柱に固定したまま後ろから押して運搬することができたようである。

彫刻としての評価のみならず、それがどのようなかたちで使用され、修復され、保存されてきたかという、モノの来歴に関わる情報は、必ずしも銅人形の調査研究に生かされていない。こうした調査は実際には文化財修復等の機会に詳細に行われるものであるため、今後の調査研究の深化に期待したい。

ところで、本研究で発見した『第六回極東熱帯医学会附帯展覧會 日本医学歴史資料目録』という資料によると、東京帝室博物館（現東京国立博物館）の所蔵品となっていた銅人形が、アジアにおける熱病等の熱帯病に関する国際学会の展覧会に出陳され、多くの観衆の目に晒されたことがわかる。極東熱帯

医学会の展覧会は、西洋医学の分類のなかに漢方医学の資料を位置づけ、日本の医学の伝統を漢方と西洋医学との融合の歴史として描くところに特色がある。展覧会の出品目録からは、展示資料のほとんどは古書籍と医術の道具であった。そのなかで、等身大の銅人形は衆人の注目するところであつたらう。西洋医学に対する、東洋の医学知を紹介する代表例として、銅人形はそれまでとは異なる存在意義を持ち、以後博物館で展示されるものとなっていく。銅人形に対する近代におけるまなざしの変化は、今後さらに研究する必要がある、本研究で得た新たな課題である。

また、今回行ったドイツ国内での調査の過程で、ドイツ国内の博物館には医学史関係のコレクションが相当な規模で存在することが明らかとなった。二〇世紀初頭に開催された衛生博覧会等では、日本を含む東洋医学の文物も陳列され、一部は現在もドイツ国内の博物館に収蔵されている。また、あるいは近代のある時点で、骨董商を通じて医療関係の資料が日本から持ち出された可能性もある。この資料の来歴については、今後のヨーロッパの日本学の研究成果等に期待するとともに、引き続き問題意識を持って研究していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

① 加藤幸治 2013 「紀州藩で製作された銅人形について ―その監修者と近代における展示についての覚書―」『歴史と文化』49号、東北学院大学学術研究会、39-52頁(査読無)

〔学会発表〕(計1件)

① 加藤幸治 「有形民俗文化財の保存活用の現状と課題」『平成22年度第2回文化振興部会研修会』(招待講演)主催：一関地方社会教育協議会 場所：一関市博物館 実施日：2011年2月24日

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 幸治 (KATO KOJI)

東北学院大学・文学部・准教授

研究者番号：30551775

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし